

くすりばこ



薬剤部
矢留 徹



87. がん薬物化学療法について

そもそもがん細胞って？

人間の体は無数の細胞からできています。実は、がんは普通の細胞から発生した異常な細胞のかたまりのことを示すのです。

正常な細胞は、体や周囲の状態に応じて、増えたり、増えることをやめたりします。例えば、ケガをすればその部分を修復しようと細胞が増殖して傷口をふさぎますが、傷が治れば増殖を停止します。

一方で、がん細胞は体からの命令を無視して増え続けます。勝手に増えるので、周囲の大切な組織を壊したり、別の部位に移動してそこでまた増えることもあります。

がんに対する治療方法って？

基本的に「手術療法」「薬物化学療法」「放射線療法」の3種類があり、これを三大療法と呼んでいます。日本では、これまで手術ががん治療の中心にありましたが、近年では薬物化学療法や放射線療法が進歩し、がんの種類やステージ(病期)によっては手術と変わらない効果が認められています。

様々な検査を行いながら、“どの治療方法がその人のがんにもっとも効果を期待できるか”を探っていきます。場合によっては、2つ以上の治療を組み合わせることもあります。

薬物化学療法の種類について

薬物化学療法には大きく分けると、「錠剤やカプセルなどの飲み薬による方法」と「点滴や注射などで体の中に直接抗がん剤を投与する方法」、加えて「これら2つを組み合わせ使っていく」の3つがあります。

どれが良いと言われれば、のみ薬と点滴や注射を組み合わせると多くの薬を使う方が効果的なのではないかと思う方もいらっしゃると思います。実際の治療については、がんの種類、広がり、他に行う治療や、患者さんの病状や希望などを考慮して決定されます。一概に、強い薬を使う＝がんに対して有効というわけではないのです。

抗がん剤は、がんの増殖に合わせて増殖しやすい細胞に効果を示しますので、増殖しやすい正常な場所にも作用してしまうことがあります。例えば、血球を作り出している骨髄、再生を繰り返す髪の毛や爪、意外と知られていない腸(お腹)の粘膜も日々新しくなっているため、影響が出る可能性があります。

治療を行っていく上では薬を使わない期間を設ける場合があります。がんと闘う上では、体を元気に保つことが必要になってきます。薬を入れるだけではなく、体の回復に充てる時間も大切な治療の一環になってくるのです。

外来にて診察前に薬剤師面談!?

このようにがんを治療する時の方法は患者さんそれぞれに合った内容を選択します。使用していく薬の量は身体の大きさに応じて変化し、症状に合わせて調節していくこともあります。薬の種類、量、使い方など1人1人によって選択される内容が異なっていくため、現れる副作用も個々で異なる場合がほとんどです。

入院をして化学療法を行う場合は病棟専属の薬剤師がお話を伺い、治療のお手伝いをさせていただきます。

また、当院では外来にも化学療法担当の薬剤師を配置し、通院しながら治療を行っている方々に対して、来院時に採血を行ってから、その結果が出るまでの空き時間を使って、お薬の説明はもちろん、ご自宅での体調についてのお話を聞かせていただいています。

その時間以外にも何か相談したいことなどがあれば「患者支援センター」までお気軽にご相談ください。

薬剤師外来のご案内

場所 : 1階 患者支援センター
日時 : 月曜日～金曜日(祝祭日を除く) 8:30～12:00
担当者: 薬剤師 弓削 理恵子、矢留 徹

